

## 『007/ カジノ・ロワイヤル』

2006年／アメリカ／マーティン・キャンベル監督作品

### 独特な空気感ただよう 丁々発止のスリリングな心理戦

会員 大久保 朝猛 (60期)

6代目ジェームズ・ボンド、ダニエル・クレイグによる、007シリーズ通算21作目である。

物語は、未だ「00（ダブル・オー。イギリス情報局秘密情報部、通称「MI6」のメンバーのうち、自己の判断で被疑者を殺しても不問に付される、所謂殺しのライセンス。）」の称号を得ていない若き日のジェームズ・ボンドの描写から始まる。チェコ共和国プラハを舞台とした、白黒画面のこのオープニングは、圧巻である。

若き日のボンドは、局長による機密漏えい事件を追ひ、局長室で潜み隠れていた。果たしてそこに現れた局長との対峙の一幕。ボンドは、機密漏えいの事実を指摘するが、素早く引き出しから銃を取り出しボンドに向かって構える局長。「残念だ。知り合えなくてな。」と、撃鉄が落ちるが、カチン、と、空砲である。一瞬にして形勢逆転、シリンダーはボンドが抜いていたのである。「これなら抜いたよ。結構やるだろ？」乾いた声で、局長が答える。「まあな。どう殺した？」「あんたの相棒？ 無惨なものさ。」「殺った気分はどうだ？ 辛い？ 心配ない。二度目の殺しは…」そんな会話をボンドのサプレッサー付の銃が鈍く遮る。「そうだな。ずっと楽だ。」

ストーリーは、このオープニングを皮切りに、テロリストの資金運用をするル・シッフルが仕組んだ航空機爆破事件とこれによる航空会社株の暴落を見越したカラ売りを、ボンドが航空機爆破事件を阻止するところから始まる。これにより、ル・シッフルはテ

ロリストから預かった金をほぼ失い、テロリストから追われる身となった。ル・シッフルが生き残るには、その明晰な頭脳を駆使してモンテネグロの高額ポーカーに参加し勝ち残るしかない。そんな状況下、ボンドは、ル・シッフルの意を打ち砕くべく、イギリス財務省から送られた監視役ヴェスパー・リンドと共に、国家予算1500万ポンドを賭け金として預かり、モンテネグロでル・シッフルと対決することになるのである。

このポーカー、日本の家庭でお馴染みの5枚配るクローズド・ポーカーではなく、テキサス・ホールデムという、2枚配って場の5枚と組み合わせるカジノ流のポーカーである。ここでのボンドとル・シッフルの頭脳戦、読み合いがまた非常に興味深い。真剣勝負の高額ポーカーの場で、ボンドがふとカクテルをオーダーしたことをきっかけに、他のメンバーも次々に追随、場の空気、流れが変わって行くシーン。ル・シッフルが、受けるか流すかの大決断の場面で、無表情だが鋭い目つきで長い時間、じっとボンドを見据えている間の独特な空気感。本稿をお読みの弁護士の方は、職業柄、丁々発止のスリリングな心理的駆け引きをされることも少なくないだろうが、そんな皆様だからこそ「うんうん、分かる、この感じ！」と頷ける場面は多々あり、楽しんで頂ける作品である。

この秋11月には最新作である23作目、「スカイフォール」が公開予定、既にYOU TUBEでTRAILERを見ることができるが、今回も期待大である。